

●現代人物列伝 2

遠大な戦略的政治家・周恩来

中嶋嶺雄



つぎつぎと革命的リーダーが生まれては消えていった中国。周恩来は、そうした激烈な軌跡の中で生きてきた。しかしそれは、“時の実権”とは微妙な相対性を保っていた。そしていま、新生中国の主演として華々しく舞台に登場してきたのである。

『不倒翁』『中国のミコヤン』『No. 2にならない男』——周恩来は、これらの通俗的な評価をすべて知りつくしつつも、それを超えたところにさらに遠大な戦略的構想を秘めている政治家なのであるまいか。彼こそは、もっとも一貫した『毛沢東批判者』であり、そして『最後に笑う者』かも知れない。

耳もとに残る必死の叫び

あれからすでに6年半の歳月が流れたが、1966年秋といえば、全中国がまさに熱狂と興奮のルツボのなかにあった時期であった。いうまでもなく、文化大革命が開幕し、その起爆剤になった紅衛兵運動が最高潮に達していたところである。

この年の11月12日、北京の人民大会堂では孫文生誕百年記念大会の行事が盛大におこなわれ、それに「外賓」として前列の席に参加していた私は、すぐ目のまえで演ぜられつつあったドラマを——いや、実はそれはけっしてドラマどころではなく、その1コマ1コマの場面が「食うか食われるかの激烈な闘争」だったのである——全身が吸いこまれるような思いで見入っていた。

「中国革命の父」孫文の生誕百年を祝うこの行事は、本来、中国にとって重要な国事であり、その最高主催者は国家主席の劉少奇であることは、1年まえからすでに公



宋

式に予告されていた。だが、当日の招待状にはすでに劉少奇の名前はなく、ヒナ壇には劉少奇、それに鄧小平も並んではいるが、新華社のカメラマンはこの2人にフラッシュの放列をあびせることも避けている。

もとより、孫文未亡人の宋慶齡女史は当日の重要な主役であったが、なんといっても、周恩来総理の役まわりは、1まわりも2まわりも大きかった。その周恩来は、一目して瞭然とする劉少奇、鄧小平の撫然たる態度を後目に孫文をたたえ、そして、それ以上に毛沢東主席をたたえていたが、その演説の最後の「毛主席万歳！ 万々歳！」というかけ声は、たんに儀礼としての賛辞ではないばかりか、必死の訴えでさえあるかのように真剣味を帯びていた。いささかカン高く、うわずってさえいたその声は、いまでも私の耳もとに残っている。

周恩来によるこのような必死の毛沢東賛歌を劉少奇がそのときどのような思いで聞いていたのか想像することは、いまとなっては酷であろう。だが、私は周恩来ほどの人物が、これほどまでに真剣に「毛主席万歳！ 万々歳！」と叫んでいるのを目のまえで聞いていて、中国の政治的現実の厳しさに慄然とするとともに、それほどまでに毛沢東は大きな存在なのかとも思われ、そして一方では、その叫びのどこかに、実は周到に計算されたなにかが隠されているようにも思われた。

仮説としての“最後に笑う者”

私の脳裏にも強く印象に残っているこの場面を、今日の時点で分析し検討してみると、文化大革命の開幕期には、劉少奇 鄧小平らの実権派と、毛沢東＝江青夫人、それにのちに失脚した林彪や陳伯達ら当時の毛・林主流派との抗争に直接的には関与せず、むしろ実権派指導者と政策的に近い立場にあったとさえ思われる周恩来は、

66年8月の紅衛兵出現以降、毛沢東にすべてを賭け、その賭けのために日夜身を呈し、彼自身の面目を忘れて献身しはじめていたと思われていただけに、このときの叫びは、それなりの真実であり、周恩来の立場の^{せみめい}闡明でもあったのである。

だが一方、そのような真実を超えて周恩来にはなお遠大な計算がなかったであろうか。もとより、その答えは、「毛沢東以後」の時代になってはじめて明かされるであろうが、なぜ私がこのような見方に固執するかといえば、周恩来こそ、もしかしたら、一貫した「毛沢東批判者」ではないのか、という刺激的な仮説に、私はかなりとらわれているからである。だから、すべてを知りつくし、すべてを読みこんでいる周恩来は、みずから「最後に笑う者」であるかもしれないことをもまた、すべて計算しつくしているのではなかろうか。もとより、周恩来は、たとえそのような意識をもっていようと、かつて彭徳懷がそうであり、劉少奇がそうであり、いままた林彪がそうであったことの宿命を生々しく目撃しているだけに、これらの指導者がおこなったような方法で自己を表明しようとはけっしてしないであろう。しかし、今日見受けられるような「脱文革化」「文革否定」「毛沢東体制下の非毛沢東化」現象等々を、このような周恩来の遠大な構想との関連でわれわれ外部世界の者が観察してゆくことは十分に可能なのである。

しかし、このような仮説を提起するからには、ここでは次に現代中国における周恩来の役割りをその大筋において位置づけなおしてみなければなるまい。

“英雄時代”の終わったあとに

20世紀のほぼ前半は、偉大なる政治的・民族的英雄の時代であった。レーニン スターリン ヒトラー チャ

ーチル ルーズベルトあるいはガンジー ネールなどの巨星を、それぞれさまざまな評価が交錯するとはいえ、われわれはすぐにあげることができる。もとより、ドゴールもここに加えねばならないが、彼もいまは亡く、毛沢東および蒋介石という、いずれも現代中国の敵・味方にわかれて対峙する英雄のみを残すこととなっているのは、中国こそ、今世紀の世界史の大きな焦点であったことを思うとき、そこにはさすがに感慨深いものがある。

ところで、先年のドゴールの死（1970年11月）に際しては、『ニューヨーク・タイムズ』が、その偉大さを「つねに世界を怒らせながら、それをひっかき回した比類なき人格と個性」と評して^し慟んでいた（同紙1970年11月10日）。だが、「つねに世界を怒らせながらも、それをひっかき回し」てきた英雄としては、ドゴール以上に毛沢東がそれによりふさわしいことは、おそらく衆目の一致するところである。いうまでもなく毛沢東は、前述の20世紀の巨星たちの中では誰よりも長期にわたって、ときには「世界を怒らせ」、ときには「それをひっかき回し」てきたからである。だからこそ、いま全世界は、中国の民衆とともに、やがて来たるべき毛沢東の天寿の果てのあとの中国の姿を、さまざまに描き、推測してみなければならなくなっているのである。

そのように比類なき毛沢東の個性は、毛沢東自身も、有名な自作の詩「沁園春〈雪〉」のなかでみずから暗示しているように、中国の歴代の英雄、たとえば秦の始皇帝や漢の武帝あるいは蒙古のジンギスカンをしのぐものであるのかもしれない。しかし、毛沢東は、そのような英雄として天寿をまっとうしようとしているがゆえに、その死がもたらすであろう衝撃とその後の事態についても、すでに準備がなされているということもできよう。結果的にはきわめて重大な失策と化してしまったとはいえ、毛沢東後継者として林彪が党規約のなかで指名され

たという九全大会の異例の措置も、当時としてはこのような準備の一環であった。しかも、毛沢東は、まさに歴史の断層の最底辺に落ち込んでいた文明大国・中国を再び歴史の本流に復権させた「革命的中国」の時代の英雄であり、民族的な指導者ではあったが、今日から21世紀にかけて、中国がそのような「革命的中国」としての熱烈ではあるが閉ざされた中国の時代から、いよいよ開かれた国際化時代に対応すべき中国へと進みつつあるとき、ある意味で毛沢東の時代はすでにおわったともいえるのである。文化大革命の今日のような結末と米中接近から日中国交へと動いた中国の姿を見るにつけ、ますますその感は深まりゆくのである。

このようなとき、周恩来の存在は、毛沢東と比較して年長的には5つの違いしかないとはいえ（毛沢東は1893年生れ、現在79歳。周恩来の生年についてはさまざまな説があるが1898年説をとっておく。現在74歳）、あまりにも大きな意味をもっている。しかも、つねに広い国際感覚のなかで外部世界に対応し、状況の流れゆく方向を見定めつつ国内の諸情勢に対処してゆく周恩来の方向感覚こそ、今日の、そして近き将来の中国が是非とも必要とするものなのである。

革命家としての軌跡

このように考えたとき、毛沢東の来たるべき死は中国の民衆にとって、たしかに大いなる悲しみではあろうが（あるいは、かつてのスターリンの死がそうであったように、それによって「解放」を味わう人びともまたあり得るであろうが）、周恩来の生命は、今日の中国がなお長期にわたって是非とも必要とするものであり、もしも周恩来に死が訪れたならば、それは中国にとってなにもにも代えがたい損失であるのみならず、きわめて困難



な、不幸な事態を中国に招くことかもしれないのである。

しかも、中国現代史の激動の局面をふりかえってみると、湖南の農村や井岡山で農民革命・根拠地革命に従事していた毛沢東は1935年の長征途上、中国共産党遵義会議ではじめて党内指導権を確立して、ようやく政治権力の第一線に立ったのであり、この間、「大躍進」政策が挫折した1959年から65年の文化大革命開始期までは、その実権を劉少奇・鄧小平らの実権派にゆだねざるを得なかったのにくらべると、周恩来は、天津の学生運動のリーダーとして1919年の五四運動の先頭に立ち、やがて1921年の中国共産党創立ののちには、「勤工儉学」運動の留学生として滞在していたフランスやドイツで中国共産党の支部をつくり、帰国後は、のちに林彪 徐向前 羅瑞卿 黄克誠ら中国紅軍のキラ星を輩出させた黄埔軍官学校政治部主任代理となるなど、その出発当初から終始一貫、中国革命の重要なリーダーとして登場しているのである。やがて周恩来は、中国共産党五中全会(1927年)、同六中全会(1928年)でも中央委員となり(いずれも毛沢東は中央委員に選ばれなかった)、当時の中国共産党が陳独秀路線から李立三路線、王明・博古路線へと変転していったときにも、一貫して党の軍事面での最

高責任者であった。さらに周恩来は、従来の路線が批判され、毛沢東路線が確立してのちも、40年代前半の延安時代、中国共産党七中全会(1945年)を経て、中国革命勝利後の同八中全会(1956年)、文化大革命収拾期の同九中全会(1969年)へと、つねに最高指導者の一翼を担い、今日にいたってきたことはよく知られている。

のみならず、中国革命の悲劇の集中点であった1927年の上海クーデターにおいては、黄埔軍官学校長として周恩来の才能を知りつくしていた蒋介石に逮捕されながらも、あやうく窮地を脱して蒋介石に地団駄を踏ませた。やがてかの有名な西安事変(1936年)では、急きょ、西安に飛んで張学良 楊虎城を説得し、内戦の停止と抗日民族統一戦線結成のために、蒋介石の釈放に努めるという心にくいばかりの離れ業を演じた。抗日戦争の勝利直前、1945年8月におこなわれた重慶における国共会議では毛沢東をたすけて蒋介石と再び国共交渉をおこない、やがて中華人民共和国成立後は、つねに、台湾解放のための台湾同胞にたいする呼びかけ人になるなど、蒋介石と国民党にとっても、周恩来こそは毛沢東以上に宿命的な対決者であり、交渉者であり、あるいはつねに手だまにとられることをよぎなくされてきた策略家なのである。

共鳴と共感を呼んだ外交の手腕

このように、一貫して中国現代史の激動の局面に深くくいこんで歩んできた周恩来の政治的蓄積からすれば、新中国の成立後、国务院の総理として、また1959年までは外交部長も兼任しつつ、国際関係の第一線に立って中国外交を推進することは、いかにも容易至極なことであり、むしろ、そのような才能と経験のゆえにこそ、周恩来外交はたんに中国外交としてのみか、戦後の国際政治の大きな動脈としても存在しつづけてきたのである。

周知のように、周恩来の名声がその外交の手腕によって、国際社会に広く轟きはじめたのは、1954年のインドシナ休戦と朝鮮戦争休戦にかんするジュネーブ国際会議前後からであった。この年、周恩来は、インドのネル首相とのあいだで平和5原則にかんする合意に達し、翌55年の第1回アジア・アフリカ会議では、この平和5原則に基づく「バンドン精神」を謳歌して平和5原則外交を唱導し、アジア・アフリカ新興独立諸国の連帯による国際平和の維持と民族独立の強化、そのための積極的中立主義を呼びかけた。こうした一連の行動は、たんに新生中国の平和外交として国際政治に新風を吹き込んだばかりか、多くの人びとの共鳴と共感をさそったのである。

だが、それまですでに周恩来は、建国直後にモスクワを訪れた毛沢東が、スターリンに冷遇されつつ、中ソ友好同盟相互援助条約交渉でも難航が続けていた1950年1月、急きょ、モスクワに飛んで彼一流の交渉力で毛沢東をたすけたり、また、国連での中華人民共和国の正当な地位を求めて、いくたびか国連と交渉を重ねるなど、その外交手腕はすでに十分に発揮されていたのである。

やがて1953年のスターリンの死は、はじめて中ソの平等な友好関係形成への契機となり、それは、1954年のブルガーニン フルシチョフらの中国訪問で確認されたが、

1956年2月のソ連共産党20回大会を契機とする「スターリン批判」と非スターリン化の衝撃が、ハンガリー事件、ポーランド動乱として東欧諸国の深刻な動揺をもたらし、ソ連の威信の著しい低下となって表面化するや、周恩来ははじめて東欧にも飛んで、社会主義陣営の再団結に大きな役割を演じたのであった。

非スターリン化の過程で明らかになった社会主義社会の内部矛盾を克服するために、1957年に中国で起こされた「百花斉放・百家争鳴」運動が、思わぬ中国共産党批判を招いたときには、情勢の推移を十分に確かめてから、「民族国家の生死存亡がかかっている」として、一転して反右派闘争の推進をはかって内部をかため、やがて三面紅旗の「大躍進」政策については、是々非々の立場をとり続けて表面に立つことを避けた。彭徳懷・国防部長（当時）のように、職を賭し名声を賭して、「大躍進」政策の非を毛沢東に諫めるというようなことはしなかった。

この姿勢は、文化大革命初期までつづき、北京市を中心とするあの根強い実権派の形成や毛沢東批判の広がり大きさを周恩来自身、よく知っていただけに、彼は、情勢を見つめて、ひとたびすべてを毛沢東・林彪に賭ける決意をするまではきわめて慎重であった。もとより、その決意が定まってからは、私が冒頭で述べたように献身的な毛沢東支持を表明し、また、「百花斉放・百家争鳴」運動から反右派闘争への移行期のそれと同様に、「文化大革命は党と国家の運命にかかわる」と叫んだのであった。

大きな代価のうえに

このような周恩来の航跡は、中ソ対立というもっとも深刻な国際関係にもあらわれている。たしかに周恩来は、1961年のソ連共産党第22回大会に中国代表団長として



出席し、ソ連側のアルバニア批判に際しては、途中で席を立てて帰国するという役目も演じたが、中ソ決裂の決定的な場面は、63年の中ソ会談にみられるように、たとえば鄧小平にゆずり、あるいは彭真はじめ当時の実権派指導者にその敵対役を託したのである。このような立場は、やがて文化大革命で台頭した林彪が「人民戦争論」の立場から対ソ徹底抗戦に向かうや、69年夏の中ソ軍事衝突に際しては急ぎょ、コスイギン首相と北京空港で会談し、中ソ戦争の危機回避に全力を傾けて中ソ国交衝突を中ソ国交会談という外交ルートにのせていったプロセスにもあらわれていた。このことが、やがて「毛沢東以後」の周恩来時代における中ソ和解の可能性を推測させる根拠にもなり得るのであろうし、ソ連側が、こと周恩来にかんしては名指しの非難をしたことのない根拠になっているのかもしれない。

ともかく、中ソ戦争の危機を回避させた周恩来は、たまたま、同じ時期に発せられた「ニクソン・ドクトリン」(1969年7月)以来のアメリカの対中接近のシグナルを受けいれ、米ソ二正面作戦を避けて米中接近へと進んでいったが、こうした外交上の大転換は、それに抵抗する軍首脳を大量失墜させた“林彪異変”という大きな代価のうえにはじめて可能であったのである。それだけに、1972年2月、ニクソン大統領を北京空港に迎えた周恩来の表情は、まさに緊張そのものであり、いつものように余裕のある大人の風格も失せていた。それは、同年9月に田中首相を迎えたときのリラックスぶりとはきわめて対照的であった。

現代の中国のキー・パーソン

このようにして周恩来はいま、中国の将来を背負って立っている。

まさに現代中国のキー・パーソンとしての周恩来の姿をわれわれは見つづけているのである。以上のように見てきたとき、周恩来を「不倒翁」であるとか、「中国のミコヤン」であるとか、「けっしてNO. 2にならない指導者」であるとしてのみ描くのは、あまりにも通俗的であり平板でありすぎるといえよう。周恩来は、これらの通俗的な評価をすべて知りつくしつつも、それを超えたところにさらに遠大な構想をもち得る政治家なのであり、その評価は、毛沢東の死をまってこそはじめて可能な人物である。

中国文学者の村松暎氏は、最近の労作『五代群雄伝』のなかで、「事はまさに実を務むべし」という処世哲学によって、あの五代の権力者の興亡激しい時代を生きぬいた宰相・馮道^{ほうどう}の姿を周恩来に映してみておられるが、私には、周恩来の実務感覚と現実主義には、その処世哲学の深奥にさらにプラスされた遠大な戦略的構想が秘められていればこそ可能であるように思われる。

周恩来は、毛沢東や劉少奇やあるいは林彪とちがって、けっして自署名の論文を書かない。それはなぜであろうか。そして周恩来は、中国のどの民衆からも広く支持されており、期待されている。困難な事態を調整し、收拾し、妥協することこそが政治だとするならば、周恩来こそ、まさに世紀の政治家であろう。そして、もしも「最後に笑うのは周恩来かもしれない」という想定が現実化するかもしれないと考えるならば、つねに毛沢東政治の「しりぬぐい」をしてきた周恩来こそが世紀の英雄になるのかもしれない。いずれにせよ、その最後の評価までには、もう少し時間をかけなくてはならないであろう。

<東京外国語大学助教授>